

## 学習理論の実験的研究-観察能力構造の解明に関する教育心理学的研究-

著者	佐々木 保行
号	7
発行年	1965
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14988">http://hdl.handle.net/10097/14988</a>

佐々木 保 行  
さ さ き やす ゆき

学位の種類 教育学博士  
学位記番号 教博第7号  
学位授与年月日 昭和41年3月25日  
学位授与の要件 学位規則第5条第1項該当  
研究科専門課程 東北大学大学院教育学研究科  
(博士課程)教育心理学専攻  
論文題目 学習理論の実験的研究  
—観察能力構造の解明に関する教育心理学的研究—  
論文審査委員 (主査)  
教授 松本 金 寿 教授 塚田 毅  
助教授 宮川 知 彰

論文内容の要旨

人間による現実の感性的認識の積極的な形式である観察は、人間生活と活動のあらゆる分野において不可欠なものであり、とくに、教授—学習活動において、子どもの観察能力の発達、知識習得の効率に多大な影響をおよぼすであろうと考えられる。したがって、観察能力の構造の解明は、学習理論の科学的創造に役立ち、学習心理学のあり方に一つの方法論を提起するものであらうと思われる。こうした観点から、以下の実験を試みた。

第1実験系列(観察能力を規定する諸要因に関する実験)

結果の要約：次の諸要因が見出された。すなわち、1)対象を観察するばあい、繊細な叙述を提供できること。2)対象のあまり目立たない性質、部分、作用、状態などを指摘できること。3)観察した対象の直接的知覚にもとづいた根拠づけを明確に指摘できること。4)対象を比較し、類似点および相違点を明確に指摘できること。5)計画的、体系的な観察行動がとれること。

第2実験系列(観察手段の変動による対象物の性質の認識に関する実験)

結果の要約：対象物の諸性質について、最も多くの叙述を与えた観察手段は、視知覚と触知覚とによる複合的な観察、ついで、視知覚のみによる単独観察、第3位は触知覚のみによる単独観

察であった。したがって、対象物の性質の認識で最も完全な観察手段は、目と手との併用による観察であろう。

#### 第3実験系列（観察能力の類型化とその構えについての実験）

結果の要約：1）客観的な観察過程を規準として、主観的観察群・客観的観察群・中間群の三つに類型化された。2）主観的観察群の観察過程は、一般に、刺激語を意味づけて変容させる傾向に特徴をもつ。

とくに、無意味語のばあいには顕著である。また、図形の観察でも、顕著な変形が認められた。

3）客観的観察群の観察過程は、見えた部分の文字のみを発言し、推測して文字全体を発言することはみられなかった。また、図形観察でも、事実を歪曲して描画することはほとんどみられなかった。4）中間群の観察過程は、主観的な要素の強くあらわれた刺激語の叙述や図形描画を行ったり、また、客観的な要素を伴った発言や描画もあり、傾向として一定しないことに特徴がみられた。

### 論文審査結果の要旨

学習心理学の研究は、現代アメリカ心理学における行動研究につらなる大きな領域ではあるけれども、佐々木保行の研究は、こうした流れとは別な角度から、つまり人間の学習、しかし、学校における教育課程の履習を目標にした方向——授業研究を目ざしたものである。彼は大学院在学中の過半を、こうした点に向っての諸種の理論的研究に従事していた。本学位論文の第Ⅰ部を構成する三つの章は、アメリカの行動研究から導き出される学習研究よりも、教育心理学にふさわしい方途として、メンチンスカヤ、クルチェッキ、ザンコフ、松本等の流れにそった授業研究への道を選ぶに至った事由を、かなり明確な姿で記述したものである。別項の学位論文の内容要旨は、こうした視点に立っての実験的研究として、まず観察能力の構造分析を行なった概要を記したものであった。

さて、すべての実験が観察から始まり、科学上の諸知識もまた観察によることが多いように、観察能力の構造分析は、授業研究という新しい研究分野にとって、極めて重要であることは論をまたないところであろう。佐々木は、まず観察能力を規定する諸要因を実験的に確かめるとともに、この結果を、さらに観察手段の変動性いかんという操作を通して一般化した上で、観察能力の類型化にまで発展させて、本学位論文をひとまず閉じたのであるが、別項の学位論文の内容要旨にも記されているように、一見、平凡な心理過程として見過ごされていた観察能力を、このような精細な姿にまで分析総合した佐々木の創意性は、多とするに値するであろう。これには、実

駿校である東北大学教育学部附属小学校の全面的な協力も忘るべからざる背景をなしているかと思う。

もちろん、佐々木によって指摘された観察能力の構造要因は、児童におけるそれであって、科学者一般には必ずしも及んではないし、それと学習能力との関係も未検討であるし、いうところの観察能力の類型も、もっと普遍化の手続きを必要とするであろう。けれども、こうした日常平凡な事実に、科学的検証のクサビを打ちこみ、知識技能習得の道に、つまり今後の授業研究により大きくつらなる視点を提供したことは特筆に値するところと思う。

よって、教育学博士の学位を授与されるに適當なものと認定する。